

【問】運動会で、野々宮さんに話しかけられたとき、美禰子はとても嬉しそうだった。

野々宮さんが美禰子を喜ばせた言葉とは何か。

[正直、この場面は、深読みせずに、書いてある通りに受け止めたい。おそらく野々宮は綺麗に着飾った美禰子の美しさを褒め、画家の原口が、美禰子を画にするチャンスを狙っているから気を付けなさいと言った程度だろうと思う。そういう風に言われて、美禰子は単純に喜んだのではないだろうか。その何でもない場面を、三四郎は凝視し、何を話したかまで問うてくる。美禰子の自然（無意識）と三四郎の疑心暗鬼（意識）が見え、三四郎がいかに囚われているかが見える]

### ■美禰子の笑顔の理由

「常日頃、私にそっけない野々宮さんが、初めて優しい気遣いを見せてくれた。しかもそれが私の結婚問題に関連することである。野々宮さんは単に研究に追われて忙しいだけで、私を嫌っていたわけではなかった」と認識できた嬉しさ。

### 【原文】

(野々宮さんは)

低い柵の向側から首を婦人席の中へ延ばして、何か云っている。美禰子は立った。野々宮さんの所まで歩いていく。柵の向うと此方で話しを始めた様に見える。美禰子は急に振り返った。嬉しそうな笑に充ちた顔である。三四郎は遠くから一生懸命に二人を見守っていた。すると、よし子が立った。また柵の側へ寄って行く。二人が三人になった。

### 【答案】

野々宮さんは「原口さんがみんなを写生しているから、気を付けなさい。ポンチ画に描かれて、見合い写真代わりにされたら大変だ」と、美禰子に注意した。美禰子はそれを野々宮さんが自分に好意を持っているからだと解釈し、野々宮さんとの結婚を意識した。

「二人が三人になった」一恋人から夫婦になり、家族となる構図。

ところで、最初の場面は野々宮さんと女二人で三人。そのあとの場面は三四郎と女二人で三人。男が入れ替わったことにより「男の差」が分かる。(どちらが夫にふさわしいか)

【原文】美禰子も留まった。三四郎を見た。然しその眼はこの時に限って何物をも訴えていなかった。

美禰子は、普段自分の事を気にかけてくれない野々宮さんが、自分の方から気遣いを見せてくれた「この時に限って」三四郎にアプローチしなかった。

(美禰子の出した絵葉書に、三四郎が何の返事もよこさなかったことに不満を持っている「この時に限って」冷ややかだった)

○三四郎に「(運動会を)熱心に見ていたのに、なぜ出てきたのか」と問われて、美禰子

は初めて少し笑った。

一三四郎は自分を見ていた。それなのに声を掛けなかった。あの夏の日と同じね。好意を持っていると思えるけれど、それを表してはくれない。

○三四郎に「何処かへ行くんですか」と聞かれて、美禰子は「ええ、一寸」と小さな声で言った。

一よし子が看護婦に挨拶に行くので、自分もついでにあの時の看護婦に挨拶に行こうかと考えていたのだが、よし子前で、三四郎の記憶を呼び覚ますのはためられた。

○「この上には何か面白いものが有って？」という美禰子の問いに「何もないです」と答えた三四郎。美禰子は「そう」と疑を残した様に云った。

一よし子との会話で美禰子はこの上に何があるのか（この上から何が見えるのか）知っている。美禰子の問いは、「あの日のことを覚えていて？」という三四郎への問いかけである。あるいは「覚えているか、覚えていないか」の確認である。美禰子はここで改めて三四郎の気持ちを量ろうとする。それは三四郎に期待を持たせないためか、それとも自分の方へ気持ちを向けさせるためか。女の23歳は男の30歳に相当する。三四郎と美禰子は同年だが、頭の中の思考に囚われる男よりも、現実に行動を起こす女の方がはるかに度胸があり大人である。純朴な三四郎はかなり鈍い。

その後、二人残された三四郎と美禰子は、初めて会った夏の日を回想する。

そして三四郎が「運動会会場で野々宮さんが美禰子に何を話していたか」問いかける。

すると美禰子は「あなたは未だこの間の絵端書の返事を下さらないのね」という。

これは「野々宮さんと自分の関係を気にしているくせに、あなたは何の意思表示もなさらないのね」という意味ではないだろうか。だから野々宮さんと自分の会話を気にする三四郎に「原口さんにポンチ画に描かれないように注意してくれただけ」と、差しさわりのない答えを返した。

#### ■美禰子が大いに野々宮さんを誉め出した理由

先の運動会会場で「野々宮さんが私の結婚問題を気にかけてくれていて、私を嫌っていない」と認識した美禰子は、彼との結婚を意識した。そのため心境は「そんなに高みを目指さなくても」（空中飛行器の会話）から、「世界に認められる研究者というのは、あのくらい自分の世界に没頭するものよ。人のためになる研究に心血を注いでいるのだから、私が構ってもらえないのは当然」（野々宮さんの妻の心得）に変わった。迷い羊(同情≒愛)の葉書に返信しない三四郎への当てつけもあるかもしれない。

しかし、注目すべきは、目先の利益に走る実業家より「自分の儲けよりも健全な未来を考える者(漱石自身も含む)」の方が偉いという主張が含まれていることである。

自分の学者としての確立を第一に考えて、頭の中に描く広い世界を実現しようとする野々宮は、美禰子の見合い用絵画を購入する資金がない。(未来を考えて現実を考えない)

頭に収めた狭い知識に囚われる三四郎は、自分と美禰子の出会いの場面が描かれたことに満足して、その先は考えていなかった。(過去に満足して現実が見えない)

「愛ある結婚」を求めた美禰子は二人へのアプローチ虚しく、ヴェネツィアに象徴される如く、商取引のような結婚に向う。(過去の思い出を捨てて現実を直視し未来へ向かう)